

ず、是は其凡をいふのみ。ちゞみはくぢらざし三寸を定尺とす續はじむるよ  
り織おろし曬しあげて端になすまでの苦心勞繁おもひはかるべし。(中略)

縮をおる処のものは娶をえらぶにも縮の伎を第一とし、容儀は次とす。こ  
のゆゑに親たるものは娘の幼より此伎を習するを第一とす。十二三歳より  
太布をおりならはす、およそ十五六より二十四五才までの女氣力盛なる頃に  
あらざれば上品の縮は機工を好せず、老に臨では綺面に光沢なくして品質く  
だりて見ゆ。貴重尊用はさら也、極品の詭物は其品に能熟したる上手をえ  
らび、何方の誰々と指にをらるゝゆゑ、そのかずに入らばとて各々伎を励む  
事也。(後略)

#### ○機婦の発狂

ひと、せある村の娘、はじめて上々のちゞみをあつらへられしゆゑ大に喜  
び、金匁を論ぜず、ことさらに手際をみせて名をとらばやとて、續はじめよ  
り人の手をからず、丹精の日数を歴て見事に織おろしたるを、さらしやより  
母が持ちきたりしとき、娘ははやく見たく物をしかけたるをもうちおき  
てひらき見れば、いかにしてか奴ほどなる煤いろの暈あるをみて、母さまい  
かにせんかなしやとて縮を顔にあて、哭倒れけるが、これより発狂となり、  
さまゝの浪言をのゝしりて家内を狂ひはしるを見て、両親娘が丹精したる  
心の内をおもひやりて哭になきけり。見る人々もあはれがりてみな袖をぬら  
しけるとぞ。友人なにかしがものがたりせり。

#### ○御機屋

貴重尊用の縮をおるには、家の辺りに積もりし雪をもその心して掘すて、  
住居の内にてなるたけ烟の入りぬ明りもよき一間をよく清め、あたらし  
き筵をしきならべ四方に注連をひきわたし、その中央に機を建てる、是を御機  
屋と唱へて神の在がごとく畏尊ひ、織人の外人を入れず、織女は別火を食  
し、御機にかゝるときは衣服をあらため、塩垢離をとり、鹽漱ぎことゝく  
身を清む、日毎にかくのごとし。紅潮をいむ事は勿論也。(後略)

#### ○縮を曬す

#### (前略)

晒人は男女ともうちまじり身を清める事織女の如くす。さらすは正月よ  
り二月中の為業也。此頃ははまだ田も圃も平一面の雪の上なれば、たはた  
の上をさらし場とするもあり、日の内にさらし場を踏へしたる処あれば、  
手頃の板に柄をつけたる物にて雪の上を平かにならしおく也。かくせざれ  
ば夜の間に凍「しみ」つきてふみへしたる処そのまゝ、岩のごとくになるゆ  
ゑ也。晒場には一点の塵もあらせざれば、白砂の塩浜のごとし。さて白  
ちゞみはおろしたるまゝをさらす、余のちゞみは糸につくりたるを拐  
にかけてさらす。その拐とは細き丸竹を三四尺ほどの弓になしてその弦に  
糸をかけ、拐ながら竿にかけわたしてさらす也。白ちゞみは平地の雪の上  
にもさらし、又高さ三尺あまり長さは布ほどになし、横幅は勝にまかせ土  
手のやうに雪につくり、その上にちゞみをのばしならべてさらすもあり、  
かくせざれば狗など踏越てちゞみをけがすゆゑ也。こゝに拐をならべてさ  
らしもする也。

#### (中略)

さて晒しやうは縮にもあれ糸にもあれ一夜灰汁に浸しおき、明の朝幾度  
も水に洗ひ絞りあげてまへのごとくさらす也。貴重尊用の縮をさらすはこ  
れらとはおなじくせず、別にさらし場をもうけ、よろづに心を用ひてさら  
す事御機をおるに同じ。我国にては地中の水気雪のために発動ざるにや、  
雪中には雨まれ也、春はことさら也。それゆゑ条件のごとく日にさらす晴の  
つゞく事あり。さて灰汁にひたしてはさらす事、毎日おなじ事をなして幾  
日を歴て白々をなしたるのちさらしをはる。やがてさらしをはらんとする  
白ちゞみをさらすをりから、朝日のあかゝと昇て玉屑平上に列たる水晶白  
布に紅映したる景色、ものたたとへがたし。